

コムギ縞葉枯病の発生を県内で初確認しました

[現在の発生状況及び県外での発生状況]

- ① 平成 30 年 5 月に、県南地域の小麦ほ場において、葉に黄白色から黄緑色の縞状の斑紋や穂の出すくみが確認された（写真 1）。国立研究開発法人農業・食品産業技術研究機構 中央農業研究センターにおいてリアルタイム PCR 法による検定を実施した結果、イネ縞葉枯ウイルス（*Rice stripe virus* (RSV)）によるコムギ縞葉枯病と同定された。その後、県西地域の小麦ほ場においても発生が確認された。
- ② 本県において、RSV による病害は、水稻でイネ縞葉枯病が確認されているが、小麦で発生が確認されたのは初めてである。
- ③ 今回、小麦で本病が発生した原因は不明であるが、発生を確認したほ場においては収量に大きく影響するものではなかった。
- ④ コムギ縞葉枯病の国内における発生は、昭和 6 年に栃木県で確認されている。

[病徴]

新葉に淡黄～淡緑色の縞状の病徴が現れ（写真 2）、のちに全体が淡黄色となる。展開前の心葉は全体が淡黄白色となり枯れる。茎葉、穂はややねじれ（写真 3）、一部の穂は白穂となる。



写真 1 発病茎(左)と健全茎(右)



写真 2 葉の縞状の病徴



写真 3 ねじれた茎葉及び穂

(写真は農業総合センター農業研究所提供)

[伝搬方法等]

本病は、ヒメトビウンカ(写真4, 5)がイネ縞葉枯ウイルス(*Rice stripe virus* (RSV))を媒介することにより発病する。

ヒメトビウンカは幼虫がイネ科雑草で越冬し、春季になると成虫になって小麦畑等に移動する。この時、ウイルスを持った虫がいると、小麦がウイルスに感染する。ただし、通常の栽培条件での本病の発生は極めて稀であると考えられている。



写真4 ヒメトビウンカ
雌成虫



写真5 ヒメトビウンカ
雄成虫

(写真は農業総合センター農業研究所提供)

[その他]

小麦における本病の被害は、栽培上問題となるものではないと考えられる。一方、水稻においてイネ縞葉枯病は重要病害であり、発病すると減収につながるため、媒介虫であるヒメトビウンカの防除が重要である。